



# JEG ニュースレター 163号

www.jegschweiz.com

2017年12月15日発行

## 小さな証

5人兄妹の長男として国際結婚の父母のもと、三つの国で育った若者の信仰遍歴、、、 P2

## 堅信礼

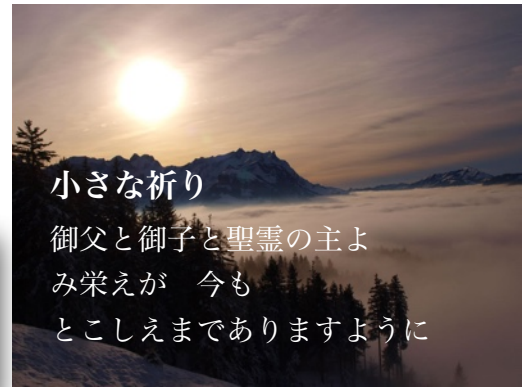
トムセン家の次男、ペーター君が10月8日、スイスJEGで堅信礼を受けられました。 P3

## ERFリトリート

欧州で救われたキリスト者が、秋の軽井沢リトリートを持ち励まし合いました。長井兄のレポートです。 P4

## ブルーリボンの祈り会

北朝鮮の日本人拉致から40年という長い歳月が経ち、ブルーリボンの祈り会会員がその思いを綴りました。 P6、7



## 小さな祈り

御父と御子と聖霊の主よ  
み栄えが 今も  
とこしえまでありますように

彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれているからです。」  
『ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。  
わたしの民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るのだから。』 マタイ2章5-6



私たちの罪と咎を全身で背負い、自ら壮絶な死に赴かれ、死にて葬られ、復活された人類の救い主イエス様が、粗末な馬小屋にお生まれになった、何にも代え難いご降誕日を心から感謝してお祝い申し上げます。 2017年クリスマス スイス日本語福音キリスト教会一同

## ちいさな証

## 神の言葉との出会い

トムセン・チャーリー

スイス日本語福音キリスト教会会員



My first encounter with God's word was a children's Bible story book with many colourful paintings. As I continued being exposed to the Bible as I grew up, I got to know a handful of stories, but not much more. I even remember sitting myself in from of my Bible at the age of 10, saying to myself that I would read through the Bible one chapter per day, but I didn't even make it past the second day. I never understood the whole Bible as a complete narrative, and I never really thought about those stories as events

that actually took place in the past.

But things started to change when I moved to Switzerland and started attending the youth group here at an international church 10 years ago. I remember hearing over and over again that I should read my Bible daily and even received a one year Bible reading plan, but my knowledge of the Bible didn't grow by much.

My thinking was strongly influenced, though, by my youth leaders and youth pastor, who kept encouraging me through their words and being examples. One time, we were asked to raise our hands to show how well we knew the Bible. I knew pretty much all of the big stories, so I thought I knew the Bible pretty well (I didn't).

What really surprised me, though, was that one of my leaders who I knew has read the Bible several times said that his Bible knowledge wasn't too good. His explanation was that no matter how many times he read the Bible, he discovered something new. This was when I started thinking the Bible isn't just some old book after all, and that it is the living word of God.

From then on, I continued growing closer to God's word as I started attending a Bible study course and even became a youth leader myself. This August, with God's help, I was able to complete reading the entire Bible, which will hopefully be the first of many times. And the more I grow closer to God's word, the more I can depend on Him and the more He transforms me into who He made me to be.

“For I know the plans I have for you,” declares the LORD, “plans to prosper you and not to harm you, plans to give you hope and a future.”  
Jeremiah 29:11

私が初めて聖書に触れたのは子供の頃にもらった聖書の絵本を通してでした。育ちながら聖書との出会いが続き、いくつかの聖書の話を知りましたが、その程度でした。10歳ごろの時聖書を最初から最後まで毎日一章ずつ読むって決めましたが、二日目でもう終わりました。聖書全体が一つの話って理解できず、その話が過去にあった本当の話だとよく実感できていませんでした。

しかし、スイスに引っ越して、国際的な教会に通い始めてから聖書への態度が少しずつ変わり始めました。聖書の知識は大きく変わりませんでしたが、何回も聖書は毎日読むべきものだと思い、一年間で聖書を全部読むプランなどももらいました。

そしてその時のリーダーや副牧師からの励ましの言葉と模範から大きく影響されました。一度手をあげて、自分がどれくらいよく聖書を知っているか表現する時間がありました。私はその時大きな聖書の話をほとんど知っていたので、自分は聖書をよく知っていると思っていました。しかし、その時驚いたのは、聖書を何回も読んでいてよく知っているかと思っていたリーダーの一人が、自分は聖書をまだよく知らないと言ったことです。彼は、聖書は何回読んでも、毎回新しいものを発見するからだと言いました。その時から聖書はただの古い本ではなく、生きている神の御言葉だと思い始めました。

それ以来神様の御言葉と近づきながら聖書を勉強するコースへ通い始めたり、自分もユースリーダーになりました。そしてこの8月に人生初めて聖書全体を読むことができました。私の望みは、これが人生で何回も聖書を読み通す第一歩になることです。神様の御言葉に近づくことを通してもっと神様に頼り、だんだん神様が計画して作ってくれた人になっていきたいです。

「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。」

エレミヤ書29:11



Hochalp



ヨハナさんから花束を受けるペーター君

てきたご両親にも感謝し、心から主を賛美します！ペーター君が、これからもイエスさまに導かれ、ともに人生を歩かれるようにお祈りします。

**2、新シリーズ** 8月から始まった新しいシリーズ”キリストに出会った人”からは”バプテスマのヨハネ”の説教をもって開始されナザレの住民、中風に冒された人、ナタナエル、サマリアの女と続き、17日のクリスマス礼拝には、シリーズも7回目となります。シリーズ7は、人の子として生まれたイエスに人類で最初に会った”羊飼ひ”をテーマに、マイヤー牧師によりみことばを語っていただきます。



このシリーズのパワーポイントが入ったマイヤー牧師の日独語によるメッセージは、スイスJEG-HPの説教サイトでご覧頂けます。[スイスJEGのメッセージ - スイス日本語福音キリスト教会のホームページによろこそ！](#)

**3、第11回ヨーロッパ教職者会**



Bad Liebenzellに欧州各地から15名の参加

ことしも南独バード・リーベンツェルにおいて、10月23日から25日まで、欧州各地の日本語教会で働かれる教職者とその夫人15人が集まり、マイヤー牧師も参加されました。教職者会では、パウロの牧会書簡として知られる第2テモテの1-2章から学びの時と、密な交わりの時を持ちました。主題聖句は「あなたは熟練したもの、すなわち、真理のみ言葉をまっすぐに解き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるように、努め励みなさい。」(II テモテ2:15)で、ヨーロッパという土壌で福音伝道に励む教職者にとって、励ましあい支え合う貴重な機会となりました。



収穫感謝祭／堅信礼／ゲスト／誕生会のスナップから

**4、賛美伝道コンサート** 11月12日に開催された臨時総会において、来年3月9日（金）スイスJEG主催の**工藤篤子/野田常喜賛美コンサート**について企画ならびに予算説明があり承認されました。チューリッヒ市中心にあるチューリッヒ・フランス語プロテスタント教会にて”PASSION”をメインテーマとするスイスJEGの歴史初めての賛美伝道コンサートは、今村泰典兄はじめ4人の実行委員によって準備活動が始まりました。

来年3月9日の開催日まで、実行委員にはさらなる知恵と力を主が与えてくださり、スイス在住の邦人と伴侶が一人でも多く救いに導かれまますよう、そして成功に向けて、教会員一同が心と力を合わせ、共に前進していけますよう祈っていただければ幸いです。

この賛美コンサートは、スイスに引き続き、パリ、ベルギー、オランダでも催行される予定です。この度、工藤篤子さんの信仰とそのお働きを知っていただくために、証（7分）ならびに賛美をアップロードいたしましたのでご覧ください。[www.youtube.com/watch?v=KfpSLW5ZmRo](http://www.youtube.com/watch?v=KfpSLW5ZmRo)



チューリッヒでの賛美コンサートのために作られたフライヤー

**5、シグリスト元宣教師が召天**



田辺正隆牧師就任式で司式されるシグリスト師。

日本と日本人を愛し、35年の長きに渡り、川崎市ほか日本各地で福音伝道のお働きをされてきたワルター・シグリスト元宣教師は2012年に本帰国後、シャッフハウゼン市に住まれ会堂管理の働きをされていましたが、10月7日に天に召されました。また、師はスイスJEGの創立にも参画され情熱を注がれました。享年72歳。10月13日に行われた師の葬儀にはスイスJEGから6人が参加いたしました。シグリスト元宣教師の日本での尊いお働きに深く感謝するとともにご遺族に深い慰めがありますようお祈りします。

**6、滋さんへの受洗祝いカード**

横田めぐみさんほか多くの同胞が北朝鮮に拉致されて今年で40年になります。5人を除き囚われた拉致被害者が未だに祖国の土を踏んでいません。被害者の親の平均年齢は85歳となり、一刻も早い帰還を期待してやみません。”神がいるなら、こんな酷いことは起きない”とキリスト教を固く拒まれていた、横田早紀江さん（クリスチャン）のご主人、滋さんが、この度イエス様を信じ、洗礼を受けられました。スイスJEGから、そのお祝いに手作りカード（手すき紙に自家製押し花）を作成してご夫妻にお送りしました。



7、世界各地から月報／ニュースレター&メルマガが届いています。オーニング宣教師、クンツ・プスキラ宣教師、ローゼンクランツNL、フーサー香織・シモン宣教師からのRundbrief、工藤篤子メルマガ、井野葉由美メルマガ、吉村美穂メルマガ、バルセロナ日本語で聖書を読む会月報、デュッセルドルフ日本語キリスト教会月報、ケルン・ボン日本語キリスト教会月報、ルーマニア川井勝太郎宣教師の週報、ブリュッセル・ミサ便り、パリ・プロテスタント日本語キリスト教会バルタージュ、イザール通信、夜越山からの便り、ミッション”宣教の声”が届いています。お読みになりたい方は、松林までご連絡ください。

# 日出ずる国から

ERF 一泊リトリート報告

会津磐梯山の秋

## イエスと共に歩むこと

「ERF一泊リトリート」感謝のご報告

長井宏敬

めぐみ福音キリスト教会



2017年11月3日(金)~4日(土)、ERF【エルフ】主催の一泊リトリートが、高橋稔先生をメッセンジャーにお迎えし、軽井沢

において開催されました。

まず、私たちERFについて紹介させていただきます。ERFとは、ヨーロッパ(Europe)でキリストに出会った私たちが、帰国後に、地域教会(Ecclesia)に根差し実を結ぶために、互いに励まし合う(Encourage)ことを目指し、2014年に発足した欧州帰国者を中心とするグループです。そういう私も、ベルギーで救われ、今、日本に住む欧州帰国者の一人です。

今回のリトリートは、ERF発足4年目にして初の単独開催、また、日程もこれまでの日帰りから、初の1泊2日となるイベントでした。

忙しい日常をしばし離れ、紅葉美しい軽井沢の大自然のもと、神様を心から賛美し、詩篇23篇のみことばをじっくりと読み砕き、ゆったりと交わり、ともに祈り・・・

すべてのプログラムが祝福され、参加した33名一人ひとりが、神様から語られ、主にあって「リトリート」できた時、共に励まし合うことができた時だったと実感し、感謝しています。

帰国後の日本においてイエス様につながり続けること、地域教会に根差すことは、帰国者クリスチャンにとって、とても難しいと感じ

じています。しかし、「主は私の羊飼いです。私は乏しいことがありません。(詩編



みことばを語る高橋稔先生

23篇1節)」とあるように、ヨーロッパで出会った羊飼いのイエス様はいつも私たちと共にいます。同じ主を信じる者が、これからも、互いに励まし合いながら、イエス様と共に歩いていけたらと願っています。

日本・ヨーロッパからの沢山の祈りに支えられ、リトリートのすべてが守られたことを感謝します。

## ERFリトリートの翌日に受洗!

長山 夏子

篠ノ井Grace Chapel



ハレルヤ!! 私は、2009年から2016年までの7年間、夫とともに英国マンチェスターで暮らしました。希望に胸を膨らませて渡英したものの、現実思い通

りにいかず、気づけば心の平安を求め、Bible studyに通い詰める日々。

帰国後の新天地は長野県長野市で、篠

ノ井Grace Chapel というルーマニア人女性ミハエラさんが牧会している教会に導かれました。しかし、私は初穂で、家族からキリスト者になることを反対され、洗礼の計画は頓挫。孤独感が増し、主の御心は何であるのか、まさにLost sheepの状態の中、マンチェスターで出会った友人からERFリトリートに招待されたのです。同じ経験と価値観を持つ仲間と繋がりたい!という飢え乾きからリトリートへの参加を決め、同時に



Grace Chapelのミハエラ宣教師と

翌日の11月5日に受洗する決心を固めました。

リトリートは、軽井沢の山の上、紅葉した木々に囲まれ、下界とは離れて主のみに集中できる素晴らしい環境で、詩篇23篇'主は私の羊飼いを'をテーマに、溢れるほどの主の恵みに浸されました。SGでは特に大きな収穫があり、初穂であることの重荷について話したところ、「愛する我が子を支えているものはいいものだ、いつかきっと親は分かってくれる」「クリスチャン

ホームに育っているので、夏子さんのチャレンジが羨ましい」と、励ましの言葉を頂きました。重荷だと感じ



ていたものは、信仰 **英国時代の私** をより深くするための主からの大きな祝福であった!と目から鱗が落ちました。

喜び踊りながら山を降り、次の日に神の家族に見守られ、洗礼式を無事に終えることができました。生まれ変わった私は、キリストの香りを放ち、周りの人々に主の愛と恵みを証ししていけると信じています。そして、今はまだ小さな篠ノ井Grace Chapelから、長野、日本、世界へと神の御国が広がりますように祈ります!アーメン!!



# 日出ずる国から

在欧日本人宣教会レポート

万座温泉の秋

## 主の家の豊かさを 心ゆくまで飲むでしょう

永井敏夫

在欧日本人宣教会運営委員



このニュースレターを読まれるすべてのみなさまに、クリスマスのご挨拶を申し上げます。

私たちが在欧日本人宣教会を構成している遺伝子は何でしょうか？それは欧州におられる日本人、日本語を解する方々が主イエス・キリストの救いにあずかり、主と共に歩み続けることを願う心です。10月中旬に開催した欧州宣教祈禱会には10数名が集まり、欧州のひとつひとつの教会、集会、家庭集会を覚えて祈りを献げました。祈ることは私たちの喜びであり、欧州の地でも福音宣教をしておられる神ご自身の喜びでもあるでしょう。



在欧日本人宣教会のメンバー

私たちはまた、欧州の諸教会が日本にある諸教会でさらに「見える化」していくことを願っています。日本基督教団などの教団派遣、諸宣教団体からの派遣、そして諸支援会派遣の方々が欧州におられますが、無牧の群れも複数あります。欧州から日本に帰国される方々、また欧州に留学や仕事、または自分探しに出かける人々など多種多様な方々の動きがあります。

さらには、ヨーロッパ・キリスト者の集いに見られるように、信徒方の純粋で熱いことばを愛する信仰があるように思います。また、欧州では牧師方、宣教師方が互いに「助け合う」という意識が育まれてきていることも見聞きしています。このような特徴を知り、祈りの課題を日本の教会が正しく受け止めていくことが、欧州での宣教が進んでいくためには肝要であると思います。いつか「在欧日本人宣教会は欧州と日本の教会のハブですね。」と言われるようになる日が来るでしょうか。



私たちは、今まで欧州宣教祈禱会を継続してきました。

しかし正しくは、お祈りの課題をくださる欧州の教会と、祈禱会に参加され、熱い祈りを献げる人々とをつなげる役割を私たちが担わせていただいているのです。

日本国内には、欧州に牧師を宣教師を「派遣」している教団、団体、支援会があります。これらの派遣元の方々が相互に繋がる機会が実現したらどんなに素晴らしいでしょうか？このようなお手伝いをさせていただく日が来ることを信じています。

ところで、12月2日には、東京都内の教会で欧州での福音宣教を覚えるクリスマス会があり45名ほどの方々が集まりました。当日の司会、奏楽、ピアノと証、メッセージ、茶菓子準備などの奉仕者た



45名が集ったクリスマス会

ちは、それぞれがヨーロッパの諸教会に集っていた方々でした。今回は、これからイギリスに赴任する予定のご夫妻を覚えて一同で祈る機会もありました。このような状況を見ると、クリスマス会は私たちの単独主催というより、ヨーロッパの諸教会と共催させていただいている感じさえました。



在欧日本人宣教会主催クリスマス会の集合写真

さらに大きな夢を申し上げるならば、欧州キリスト者の集いの日本版の開催はどうでしょうか？欧州で主に繋がった方々が日本で集い、交わり、礼拝する機会が実現を祈ることは神さまに願ひ過ぎでしょうか？

欧州の諸教会のみなさまが、次のみことばのように、神さまの素晴らしさを互いに味わう間柄を継続し、その数がさらに増えていきますようにと祈ります。私たちは、これからも神さまの恵みの証がヨーロッパで、そして日本で共有されていくためのお手伝いをさせていただいたらと思います。主は本当に素晴らしいお方です。

「彼らはあなたの家の豊かさを心ゆくまで飲むでしょう。あなたの楽しみの流れを、あなたは彼らに飲ませなさいませ。」詩篇36篇8節

在欧日本人宣教会のフェイスブック

facebook [www.facebook.com/zaiou.jom/](http://www.facebook.com/zaiou.jom/)

囚われ人に釈放を！

# “拉致から40年”に思う



日本・ヨーロッパ ブルーリボンの祈り会

## 主の憐れみの手を！

岩崎建男、三恵子

東京

東京で毎月行われている「横田早紀江さんを囲む祈り会」は2017年11月に174回目を迎えました。拉致被害者の帰国は未だに完了しておらず、被害者とその家族の方々のご心労は余人には耐え難いものと思わされます。続けて主のあわれみの手が延ばされることと、高齢になられた被害者家族のお一人お一人に主の平安と慰めが豊かにあるよう祈るばかりです。

2007年の欧州キリスト者の夏の集いはミラノで開催されました。この集いに私たちも参加致しました。集会室の外に「横田早紀江さんを囲む祈り会」のご案内を置かせて戴き、何人かの参加者とお話をさせて戴きました。これを切っ掛けにその後、幾つかの欧州の日本語教会・集会でも毎月1日に「ブルーリボンの祈り会」が始められ、スイス日本語教会がHPにこの祈り会のことを案内して下さることを誠に有難く感謝しております。



トランプ大統領との面会（東京）

拉致に関する北朝鮮の狙いは世界の記憶の風化であります。

す。日本でも繰り返される核実験と弾道ミサイル発射実験に耳目は向いており、拉致問題への関心が希釈されているのではという恐れがあります。こういう情勢の中、トランプ米大統領の初訪日時に、トランプ大統領と横田早紀江さんや被害者とその家族との面会が実現したことは大きな意味があったと考えます。

どうぞ皆さまも続けて、①拉致被害者が一日も早く帰国できるよう、②高齢の被害者家族の健康が支えられるよう、③日本の世論がしっかりと意識を持ち続けるよう、④北朝鮮が真の民主国家になるようお祈り下さい。

## 横田ご夫妻へ

佐々木千恵子

ドイツ

スイス・ブルーリボンの祈り会から、いつもお知らせをいただき、お祈りさせていただいております。

滋さんの洗礼は、本当に嬉しくて、主に感謝いたしました。めぐみちゃんが解放され、ご夫妻の胸元に戻って来ると私は固く信じています。ヨーロッパから小さな力ですが、精一杯、応援していきます。

拉致問題は私にとって他人事ではなく、キリスト者でなかったとしてもずっと忘れることのできないことは確かなのです。



めぐみさんは小学5年生（山口県萩市）

です。若いときのヨーロッパでの1人旅が2、3年後であったなら、被害者は私であったかも知れず背筋がゾッとするのはです。（当時、ヨーロッパに於いても、日本人留学生や旅行者が何人も言葉巧みに騙されて北朝鮮に連れ去られています。）

「よど号」亡命者たちの秘密工作という副題のついた「宿命」（高沢皓司著、新潮社）を15、6年前に読み、「よど号」ハイジャック事件の実行犯たちとからみあった拉致犯罪の背景を知り、その陰湿さにため息が出ずにはられませんでした。この極めつけの理不尽な犯罪、被害者、居場所、犯行者のこともわかっていながら何もできないことを思う時、怒りを通りこして悲しくなります。そして、はじめの「神様、どうしてなのですか」にもどってしまいます。

横田ご夫妻

はじめ被害者のご家族はこれを何万回くり返されたことでしょうか。神のなさることは私



めぐみちゃんを抱く滋さん

たちには解りません。私には、このことについては「お委ねします。」と心からは言えないところがあります。10年前も今もそうなのです。これを信仰の足りなさ、霊的な無力と言われれば、そうです、としかお答えできないのです。このような「便り」は励ましにも支えにもならず、心を騒がせるしかないかも知れません。そうでしたら、どうかどうかお許しください。

それでも、私にできることは祈ることだけです。主が私たちを憐れんでくださいますように。

## ブルーリボン・早紀江姉を囲む祈り会



今から40年前の1977年11月15日、新潟で13才の少女が忽然として姿を消しました。20年後、その少女は北朝鮮の工作員によって拉致されて北朝鮮にいたことが判明します。その少女めぐみさんの母親横田早紀江さんはこの想像を絶する苦しみの中で神に出会いクリスチャンとなりました。

スイス日本語福音キリスト教会では、2007年にスイス・ブルーリボンの祈り会が発足し、拉致されためぐみさんはじめ私たちの同胞の釈放と帰国、そしてご親族のために祈り続けています。

[スイスJEGのHPブルーリボンの祈り会のサイト](#)  
[ブルーリボンの祈り会-スイス日本語福音キリスト教会のホームページ](#)にようこそ！

## 神様、どうしてなのですか？

黒田閑恵

チェコ

「神様、どうしてなのですか？なぜ黙っておられるのですか。」の思いは、何度も何度も涙の谷を通過てこられた拉致被害者のご家族にとって私たちには想像もつかない大きな質問であり、疑問だった（現在も）と思います。それを考えると、圏外に住む者がどんなことばで話せるのか全く自信がありません。

計り知れない喜びと慰めが

シスター・ソハラ

ドイツ

お会いしたことはありませんが、神様の愛の中で結ばれている横田早紀江様と滋様へ

1977年の11月、まさに40年前にご一家を襲った突然の出来事について知ったのは、ずっと後になってからでしたが、私自身大学卒業直後にドイツへ渡った同じ年ということもあり、同年の11月に新潟で起こったことを知り大きなショックを受けました。

当時はそんなことがあるなど想像もできなかったのです。日本列島の隣が一番近い朝鮮半島の北で起こっている恐ろしい迫害、飢餓、拷問、殺人などについても、少しずつ外の世界に知られるようになってきた頃でしょうか。ここドイツにおいても北朝鮮のために真剣に祈るグループなどもできてきました。当地のために祈りの旅をする人々もいます。



拉致された直後のめぐみさん

クリスチャンが世界中で一番ひどい迫害を受けている地である北朝鮮。

この国のために捧げられてきた、そして今日まで続けられている祈りと犠牲は、神様の御座に届いています。そして必ず神様のときがやってきます。北朝鮮の収容所の中で苦役、拷問、飢えと寒さなど精神と肉体両方の想像を超える苦しみに今日も耐えておられる兄弟姉妹の心のうめき、拉致された人々とそのご家族が通ってこられた苦しみは、すべて義なる神様のもとに記されています。

またかの国で生まれ育った人々のことも、主はすべてご存知です。人となられ、人間のあいだに住まれたお方イエス様は、苦しんでおられる一人一人の苦しみをすべてご自分のものとし、今日この瞬間にも共に苦しんでくださっています。神さまの広大な救いのご計画のなかで、罪人である人間の苦しみもすべて、イエス様のゆえに大きな意味をもっていきます。決して無駄ではありません。

そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあつて、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にい

て、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のは過ぎ去ったからである。」「見よ、わたしは万物を新しくする」ヨハネの黙示録21章3-5節

はかりしれない喜びと慰めのときが必ずやってくることを信じています。なぜなら神様の愛に、苦しみは決して決して最後のものではないからです。



心からの愛をこめ

ハレルヤ！！と共に

感謝する日を願って

フェーグリユすみ子

スイス

横田めぐみさん（当時13歳）がクラブ活動後の下校途中で消息を絶つてから、今年の11月15日で40年!!という歳月が経ってしまいました。ご両親である横田ご夫妻が心にズシン！と取り去ることの出来ない重荷を抱えたまま過ごされる日々、何とかして救出したいと署名活動、全国を飛び回っての講演会、書籍の出版、めぐみさんの写真展等と肉体的にも精神的にも限界に近い活動を続けて来られたお二人が、この「思い出したくない日」に毎日新聞の記者会見に臨まれたお写真と記事を目に致しました。



横田滋さん85歳

早紀江さん81歳

記者会見前日（11月14日）に85歳になられたという横田滋さんは杖をつき、共にこの長い耐え難い苦しみと悲しみを背負われて来た奥様の早紀江さんは81歳になられ、ご主人を労りつつそばに寄り添っておられました。こんなにも長い間“めぐみちゃんに会いたい”と待ち焦がれているのに、北朝鮮という独裁者が支配する国から、今だに救出してあげることが出来ず解決への道筋も見えず、老齢となられたお二人の姿を見るのは本当に辛かったです！“神様、お二人が元氣なうちにめぐみさんに会わせて下さい！”と心から願われます。

神様は確かにこの長い40年の間に、北朝鮮拉致被害者の救済に幾つかの足跡を残して下さいました。早紀江さんの信仰の友の皆さんの尽力に依り、「横田早紀江さんを囲む祈り会」が毎月一回、

50-70人の参加者が集いもう十四年以上も続けられていたり、ブルーリボンの祈り会・世界一致の祈りの日（毎月一日に）が日本ばかりで無く、スイスでもなされています。多くの支援者、祈りのサポーターが居て下さることは、苦難の中にあつての心強い助けだと思います。

ある祈り会で早紀江さんがガラテヤ書6章5節「人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです。」を読まれ、“難しい問題を背負わされているけれども、神様が最善な時に言うべきこと、なすべきことをされる“と話された信仰に、この信仰があつたからこそ、絶望的な状況においても耐え忍ぶことができたのだらうと私自身が励まされました。ずっとキリスト教を拒まれていた

滋さんが11月4日にイエス様を救い主として受け入れ洗礼を受けられました。早紀江さんご自身



滋さんが自宅に洗礼を受けられる

がびっくりした！と言われるほど衝撃的な出来事だったのでしょ。横田早紀江さんを囲む祈り会」では毎回、牧師先生方がメッセージをして下さるのですが、ある牧師先生がヨハネの福音書2:1-11のイエス様の最初の奇跡（水をぶどう酒に変えたカナでの結婚式）から、水をくんだしもべだけが神様がなさった奇跡だと知っていると言っていました。確かに私達に出来ることは些細で無力でしょうが、情報を流し続け、祈り続ける事によって神様の奇跡を知る者とさせて頂きたいと思ひます。

拉致被害者の方々が困難の中にあつて希望を持ち続け、一日も早く解放され、歓喜と共にご家族や祖国に帰ることが出来ますように！また再会を首を長くして待たれている被害者ご家族のご健康が守られます様に！イエス様のみ言葉を信じて、祈りを捧げる私達が、拉致被害者全員救出という神様のみ業を共にハレルヤ！！と感謝する日を心から願っています。

ドキュメンタリー映画  
「めぐみ」の米国版（2006年製作）が下のURLをクリックしてご覧いただけます。  
[www.youtube.com/watch?v=M4A7ifE2g0c](http://www.youtube.com/watch?v=M4A7ifE2g0c)